

わが家の原爆体験記

安井 幸子 (当時六歳)

爆心地より九〇〇メートル、目覚町の自宅前で被爆。熱線・放射能・爆風と恐怖・苦しみの中で四人の兄弟全てを亡くした。両親もその後次々と死亡、一人生き残る。

あまりにも大きすぎる不幸のあとの終戦

昭和二十年八月九日午前十一時二分、長崎に人類史上例をみない広範かつ深刻な被害をもたらした原子爆弾が投下された。私の精神に一生のうちで最大でもっとも忌わしい印象を強烈に残し、五十年もの時間の経過にもかかわらず、被爆当時の状況をきわめて鮮明に記憶している。それはその被害が身体上の苦しみはもちろん、一瞬にして生きとし生けるものの生命を奪い、生活崩壊の悲惨さ、都市の壊滅、そして今なお心の奥深くその恐怖は残され、いかに甚大な衝撃を与えたかを誌すものである。

この原爆によって長崎が受けた惨禍は、人類が再び過ちを繰り返さない為の全人類に残された教訓ではないか。過去に残された教訓を受けとめ学びとり、今や核時代と言われる今日をいかに平和に生きぬいていくか。これがこれから先、残されたすべての人々が考えなければならない重大な課題であると思う。

真夏の太陽が照りつけていたその日の朝、空襲警報解除ということで目覚町の自宅にもどり、近所の子供五人でままごと遊びをしようと、二軒先の路上でゴザを敷き準備にとりかかっていた。空襲のないつかの間の子供の楽しい時間だった。一番年上の十歳の女の子がお母さん役になり、平穏な時が流れた。その時、飛行機の爆音が聞こえて来た、十歳の女の子はその音を聞いて「みなさん空襲ですよ、敵機来襲ですよ、伏せましょう！」と呼びかけた。まさかその飛行機が原爆を搭載したB29（ボックスカー号）と知るよしもなく、ふだんの練習位の気持ちで、五人の子供は重なり合うようにしてその場に伏せた。その瞬間の出来事だった。異様な閃光が走り、それは太陽をいくつも重ねたようなものであり、すさまじい爆風が来襲。どよめくごう音、瞬間体は浮き上がったような、しかし目の前の何も見ることは出来ず、瞬時にして五人は生きうめになってしまった。

家々の瓦礫の下敷きの中で、息をすればまるでホースで水を流しこむような勢いで口から鼻から土が流れこむ。そんななか二人の女の子が泣き叫んでいるのが聞こえてきた。「お母さん助けて！お母さん助けて！」十歳の女の子が「お母さん達が助けに来てくれるまでがまんしましょう！」、そんな会話がはっきり聞こえてきた。私はその瞬間、息をころして土を吸いこむまいとしていた。す

ると何も聞こえなくなってしまう。どれ位の時が流れたのであろうか。私は外へ引き出された。その時、すでに火は近くまでせまっていた。割れるような頭の痛み、母は私の体をゆさぶり「他の子もここにいたの？」とたずねた。私は声を出せないまま、大きくなづいた。そばにいた叔父は「そこを動くな」と言って残された四人の子供を救出するのに懸命だった。

四人の子供は掘り出され、私は泣きわめきながらどこをどのように歩いたのかわからぬまま、すぐ近くの山の上手まで逃げのびた。そばに運ばれた子供四人は、すでに口の中いっぱい土を含み、全員息絶えていた。その時、目の前に見えたものは燃え上る家々の炎と、壊滅した町の姿。六歳の私が高台の場所からわが町の全景をながめたのは、その時が初めてだった。長崎はまさに原爆地獄とでも言うべき悲惨なものであり、それはまた長崎の悲劇の始まりでもあった。太陽のもと、つい先程まで長崎の人々の健康的な暮らしは崩壊したのである。

山に逃げのびた私達家族の前に、次々と痛められた体を支えるように、たどり着く人。熱傷を受け、皮膚をぶらぶらとさせたまま、逃げて来る人々。脱出してくる負傷者達で、山のパニックは激しいものになった。「水をくれ！助けてくれ！」の叫び声。肉親の名を呼び、なすすべもなく茫然と荒野をさまよい、息たえだえに、地面や池に倒れ込む人々。

ただ私は恐怖におののき、逃げのびた山の土手で「助かったのだなあ」と初めてものが考えられた。長男の十四歳の兄は右肩半分に熱傷を受け、二男の十歳の兄は空が暗黒となった時、近くの林から驚きと共に夢中でかけ下り、私達と山で合流した。二男はその時すでに多量の放射線を浴びていたことを知らず、助かった喜びを長男と話していた。三男の弟は崩壊した家の瓦礫の下敷きとなり、後頭部に大きな木材の切れはしが突き刺り、即死した状態で発見された。妹もその時は無事救出された。長崎の街は火の海と化していた。その時、急に黒い雨が降り出した。それを見て近くに逃げてきた人の中には、「米軍が油を落したのではないか」と騒いだ。油ではなかったが、雨滴が付着した部分には、黒い斑点模様が残った。この時、放射性物質がこの地域に、集中的に降下したものと想像される。近くの溜池のまわりには、多くの人がひしめき合っ、その水を飲んでいて。熱傷に痛められた人々の体は、その時はただ水だけを求めた。

父は、職場の人の病気見舞に、グラバー園の近くまで出かけて留守にしていた。家族の安否を気遣い、かってない町の惨状に驚き、山を越えて捜し歩き、めぐり会えたのは夕暮れ近くだった。周囲の山林や畑には、次々と息絶えた人の姿があった。「皆大丈夫か」という父の問いかけに人々は返事をする声が出せなかった。やがて夜になり、近くの国際墓地に避難場所をかえた。その墓地に

はすでに逃げのびた人でいっぱいだった。暗闇の中から、ひたすら水を求める声、うめき声が続く。誰れも何もなすすべもなく、まさに精神的機能を一時的に喪失した状態で、無言のままその場の状況に目をむけるだけだった。不安と恐怖は一段とつものって来た。ふだん一番元気者だった二男の兄はすでにその時から嘔吐がはじまり、長男は熱傷の痛みと足のけがで熱が出はじめた。私は食欲不振に落ち入り始めた。その夜まんじりともしないまま、異様な体の不調を感じながら一夜を明かすことになった。

八月十日、まだ夜も明けぬうちに、両親は即死した三男の遺体を近くの墓地に埋葬することにした。着ていた洋服の一枚を三男の顔に当てただけで、親類の子供達と共に慌ただしく埋葬した。母は最後に自分の胸にしっかりと三男を抱きしめ、「助けることが出来ずごめんよ、許してくれ」と言って、その時に出来るせめてもの親の愛を与えた。上空にはアメリカ軍の偵察機が旋回していた。

生き残った四人の子供を連れて夜遅く、靴の替りにぼろ布をまきつけてもらい、四キロはなれた道の尾駅まで、島原へ逃げのびるための道をたどったのは八月十日の夜だった。救援列車には人々が殺到した。危うく焦熱地獄を脱出したものの、焼跡には黒焦げとなった死体が転がり、暗がりの焼け野原は恐怖そのものであった。私は母に手をひかれ、妹は母の背に、長男は父の背にかつがれ、二男は激しい吐気に耐えながら道なき道をひたすら歩きつづけ、道の尾駅に着いたのは八月十一日の明け方近くだった。駅の周辺には逃げのびて来た人々の山、中にはすでに息絶えた人、また両手をさしのべ「助けてくれ！水をくれ！」の悲鳴が続いた。あまりの苦しさに「殺してくれ」と、生きることより死を願う悲痛な姿があった。避難の道中において、私は生きのびた子供達に逢うことは全くなかった。

島原の駅に着いた時、二男の兄は容態が悪化し、近くの病院へ運ばれた。長男と妹、私は駅から五キロほどの雲仙岳の北側の山麓で農業を営む親類宅で世話になることになった。精神的にも肉体的にも痛手を受け、着るものとしてない私達家族に山の人々は大変に心厚く、深い情をかけてくれた。「柿の葉を煎じて飲むとよい」とか「青野菜がよいから」等と、朝夕に心遣いを受けながら、残念ながら体はそれを受けつけず、嘔吐や倦怠が続いた。山の自然のきれいな空気の中で、健康をとり戻させたいとの両親の思いも、これまでの生活経験の中で考え対応していたにすぎず、被爆という人類にとって最初の体験である故に、どのような方法をもっても対応出来ず、その試行錯誤をくり返している間に、両親の健康にも変化が出はじめ、親も子もいったいどうすればよいのか。その判断がつけられないまま、時は流れた。またこれらの症状が原爆放射能に脅かされているなど、誰一人として知るよしもなかった。

病院の一室で必死に頑張っていた二男の兄も髪の毛は抜け落ち、高熱が続き、

茶さじいっぱいの水も受けつけないような最悪の事態となっていった。両親と私が山と病院の往復をくり返しているうち、ついに力つきて二男は亡くなった。八月二十四日の夜だった。死の直前に私の名を呼び、「幸ちゃん、さよなら、さよなら、あとをたのむ」、そう言いながら息絶えた。私はあまりの悲しさに「さよなら」の言葉が出せず、ただ別れを惜しむだけだった。雨戸一枚ほどのうすい板の上に兄を寝かせ、三十分ほど離れた親類の家に遺体を運んだ。暗がりの田舎の道をとぼとぼと歩き出し、両親も叔父夫婦も私も無言の行列であり、その姿は哀れそのものだった。

それから二・三日後、長男の具合が悪くなり、病院へ運ばれた。馬の背に乗せられ山を下りた。高熱と熱傷に痛められていた長男は、それでも元気を出そうと努力し、山を下りる時、「生まれてはじめて馬に乗った」とわずかに冗談をいった。二男の死は知らされていなかった。この日が山での最後の日になるうとは考えもしていなかった。病院へ着いても適切な治療は受けられず、腕の熱傷は悪化して、淡黒褐色にはれ上り、大変な痛みを訴え続けた。「この腕の痛みさえなければ」と言われて両親は何のなすすべもなく、一生懸命はげまし続けることがせいいっぱいだった。髪は抜け、高熱は続き、ついに九月一日、兄は亡くなった。死の直前、父に対して「お父さん、泣かないで、ぼくは特攻隊になったつもりで死んで行くのだから。さあ、涙をふいて『海ゆかば』の軍歌を歌ってぼくを送ってくれ」と言った。二男三男と亡くしたあげく、いま長男との別れがせまって来ていることに、父も耐えられなくて大粒の涙を流した。「昭信、頑張ってくれよ」すると長男は、「涙を拭いて早く歌って」とまたそういった。息子の最後の願いを聞き入れ、父がその一節を歌った時、長男は静かに息を引き取った。両親のあらん限りの涙の声、ひと月たらずのうちに三人の息子を失くしてしまった。六歳の私にはあまりにも重い悲しみだった。九月四日には私を瓦礫の中より助けてくれた叔父が、口内や咽頭の疼痛にはじまり、高熱、脱毛の症状で苦しみ「まるで針を千本も刺されたような痛みだ」と言いながら息絶えた。叔母も熱傷に苦しみながら九月六日亡くなった。

戦時中のこととはいえ、満足に食べる食糧もなく、近くの山野で採取したアカザ・ノビル・ハコベ草などよく食べたものだった。「食事ですよ！」との母の一声で、子供達はお膳を取りかこむ。時にはカボチャやさつまいもの入った雑炊のようなもので米粒をさがすのに一苦勞。それもおかわり自由といえるものではなく、「おかわりちょうだい」と茶わんを差し出すと、長男は「時節をわきまなければだめだ。お母さんの分がなくなるではないか」と注意をする。母は「お腹もすくだろうね」といって、必ず自分の空腹をおして、子供達に少しでも与えてくれた。状況は日毎に緊迫していた。不眠不休の不安定な日が何日も続いたこともあった。そんな中で家族が常に手を取り合い、緊張感をもち、

明日も元気であるように頑張る家庭であった。それはまた戦中戦後の耐乏生活の支えにもなっていた。その家族がことごとくに崩壊の道へと至り、精神的被害と相乗作用をもちながら、更に家族解体が進行しつづけた。

二人の兄が亡くなった直後から、私自身がまず熱・脱毛・口腔の出血と続き、全く食欲もなくなり、さらに両手両足にできものが多数みられ、熱と共に化膿が起こり、その傷にハエが群がって卵を生みつけ、大変な苦痛がおしよせた。つける薬もなく、ガーゼ、包帯、消毒液すら手もとになく、悪化する一方だった。何か食べものをと、父は近くの農家を訪ねまわり、やっとの事で乾燥うどんを一束わけてもらい、山でとれたきのこを入れて母が作ってくれた一ぱいのうどんは、私の命綱となった。

兄弟達との別れの後、山へ戻った時には、朝夕めっきり冷え込む秋となっていた。数ヶ月間の山での暮らしは、悲しみと淋しきの日々だった。終戦という言葉が聞かされても、もうその時には不幸はあまりにも大きく、再建の道を歩みはじめようとしても、容易に見定めも出来ず、精神的打撃もともなって両親は苦慮し、子供ながらにそんな親の顔を見て、不安な思いにかられていた。何とかして助けよう、助けてやりたいと、必死の思いで逃げにびて来た島原の地であった。自然の豊かさもきれいな水も、それらを味わうことすら出来ぬまま、死と破滅の世界へ追い立てられ、被爆後ひと月もしない内に、兄弟や親類二十三名の命が奪われてしまった。

生き残った私と妹は両親の深い愛にすぎり、全面的破壊で生きることが不自然とも思える状況の中、まさに生かされた思いを大切に、生と希望を探しつづけなければならなかった。長崎へ戻ったのは昭和二十一年四月、無残な光景がまだ数多くあった。

被爆後の生活は哀れそのものだった。焼け跡から拾い集めた釘やトタン板、材木などで家を作るというより、小屋を作るといったありさま。食糧事情は極度に乏しく、いもづるや野草など食べられるものは手あたりしだい口にしながら飢餓をしのいだ。丸裸になった被爆者には、物々交換をする衣類もなく、雨の日などはいたる所に雨もりがおこり、風の強い日には小屋が飛ばされはしないかと、不安な夜を明すことがたびたびあった、形の整った家らしいものが建ったのは、それから数年後だった。

被爆直後から体調をくずしたままの妹は二十九年四月に放射能障害による白血病で倒れ、六月には亡くなった。父もまた戦後の生活復元のため無理な努力を重ねながら、三十六年九月に肝臓障害で死亡した。三十七年に私は甲状腺ガンに倒れ、二回の手術を受け難をのがれた。助かりはしたものの、何に人生目標を求め、自分の将来にどんな可能性を見出せばよいのか、何を信じて行けば

よいのか。あの死と破滅の世界と未来からおしよせてくる不安、自分達はこれから本当に暮らして行けるのだろうか、その挟間にあつて青春時代は不安と苦悩、悲しみの連続であつた。またさらに戦後四十年にして、母もやはり原爆症による白血病に倒れて亡くなった。

自分一人が生き残りとなつた時、私は深い思いに沈んだ。それは原爆が悲惨な被害をもたらしたというだけでなく、その持続性の大きさや恐怖という点である。そのために身体上の苦悩はもちろんのこと、再建した生活の基盤は大変にもろく、戦後のさまざまな過程の中で、何回も崩壊に見舞われた。生き残つた私はそれらのきびしい試練の末に、何十回となく到来した不安定要因の中で、まさに生きるということの意義を確実なものにした。それは自分の家族をはじめ多くの犠牲者の無念の思いに深く心傾けたとき、ひとつの使命感が生まれた。幾度の試練にうち克つことによって、獲得した人類の中できわめて少数の原爆被爆者として、核兵器を否定し、人類の平和的な生存に寄与する、そこに自分のもつ信念の位置づけを見出そうと思うに至つた。

生きたくても生きられなかつた多くの人々の無念の思いを考える時、私はひとつの言葉を思い出す。「天に向つて祈るより、地に伏して真の叫びを受けとめる」。亡くなった多くの人々がその時どんな思いでこの世との別れをしなければならなかつたか。五十年の歳月を重ね感慨に身を置く時、自分の人生の歴史を振り返り、将来に責任を感じる。それ故に知り得た人間の究極の苦しみや愛を想う時、九死に一生を得た私の使命は原爆の教訓を一人でも多くの人々に語り伝え、恒久の平和を願つて行きたいと思つたことである。かつての日々を考える時、今日のこの平穏で健康的な日々が決して当り前に訪れたわけではなく、そこに多くの痛みの歴史があり、その上に成り立っている。私は常にそう思い起こし、慈と深い感謝の心を持ち、そこに真の人間性を發揮し、世界平和のためにこれからも学び、貢献し、語り伝えて行こうと思うのです。

一九九五年（平成七年）